

～昭和30年代の上尾～

昭和33年7月15日に市制施行した上尾市は、ことし市制施行60周年を迎えました。平成30年4月号から平成31年3月号までの上尾歴史散歩は、昭和30年代当時の広報誌『上尾自治だより』から、当時の出来事やその背景などを探ります。

愛育班の誕生

昭和31(1956)年5月20日発行の『上尾自治だより』第17号には、「各地区の愛育班結成なる」と題した記事が掲載されている。

昭和8(1933)年に皇太子(現在の天皇)が誕生したのを記念して、「母子の保健福祉のために」と、昭和天皇からの資金をもとに、昭和9(1934)年「恩賜財団母子愛育会」が設立された。当時は、「血は汚れたもの」という意識が強く、風通しの悪い納戸・馬小屋での出産や、助産師の手を借りない姑・隣人による非衛生的な取り扱いでの出産が多く、母子ともに感染症にり患して命を落とすことが珍しくなかった。妊娠・出産・

育児に関する迷信と因習があり、「嫁は馬牛に等しい労働力」とされていた。一方で、不衛生な環境と栄養不良から、母子保健の向上が叫ばれていた時代でもあった。

市域では、昭和25(1950)年に平方町が愛育班を創立し、「模範衛生村」に指定されて活動したのが始まりである。当時は乳児死亡率が高く、結核患者も多かったことから、衛生面の問題に取り組んでいた。平方愛育班は昭和30(1955)年5月に、その功績により県知事表彰を受けた。

昭和31(1956)年2月には、国連児童基金(ユニセフ)から妊産婦と乳幼児に、栄養不良状態の改善のためスキムミルク無償配布の申し出があり、配給のため全国的に愛育班の結成が進んだ。

同年5月に上尾・原市・大石・上平・大谷の各地区でも愛育班が結成され(写真1)、全地区で愛育班の組織ができたことから、「上尾町母子愛育会」として6地区の愛育会を統合した。農協の婦人部、くらしの会などと同じ組織であった。

昭和33(1958)年の上尾市の誕生とともに「上尾市母子愛育会」となり、「健康づくりと住み良いまちづくり」を目的として活動が展開されていった。当時の市の人口は3万7,242人。人口千人に対する出生率は17.0で年間出生数633人、主な事業としては、妊産婦・乳幼児の声掛け、健診・健康相談の協力、7歳児のお祝いなどと記録がある。さらに、各地区主催で幼児遠足や講習会といった事業も行われていた(写真2・3)。

現在も愛育班の活動は受け継がれ、今年度は、子育て経験のある女性を中心に1,422人の班員が各地域で活動している。乳幼児とその保護者が集まれる場所を提供する「親子のつどい」の開催や、乳児のいる家庭を訪問して子育てに関する情報を提供する、市の「こんにちは赤ちゃん」事業への協力などを通して、市民と地域・行政の橋渡しの役目を担っている。また、地域に根差したきめ細やかな活動が評価され、社会福祉法人恩賜財団母子愛育会から、平成28(2016)年4月から2年間の「模範愛育班」の指定を受けた。時代は変わっても、地域のつながりを大切にして活動する意義は、非常に重要であると言える。(上尾市健康増進課)



写真1 各地区の愛育班結成を伝える『上尾自治だより』(第17号)



写真3 大石愛育班の講習会



写真2 平方地区愛育班主催の幼児遠足